

仏の美学

— 聖なる沈黙 —

片 山 一 良

片山でございます。只今、学部長の永井先生から過分なお言葉を頂きました。また、皆様にはこの最終講義という時間と場所をお作り頂きましたことを、深く感謝申し上げますと思います。

この世はまさに無常であります。いつもここが始まりであり、終わりであるということでしょうか、一昨年、ご承知の通り、東日本大震災という未曾有の大震災が起こりました。また一方では、日本各地、世界のあらゆる場所でも、個人にとりまして未曾有の事柄が多発していることは、テレビやラジオで報道されておりでございます。私どもの心がいつも痛み、その痛みが止むことはありません。誰にも智慧と慈悲の心がそなわりますように、と願うばかりです。

先ほどご紹介にもありましたが、私は古稀を迎えました。「古来稀なる人間」となったわけです。この大学にお世話になり、学生時代を含めて五十年が経っております。先日発行されました駒澤大学の『学園通信』で思い出を語らせ

て頂きましたが、私は前半の四半世紀の間は何もわからないで外の形ばかり追い求めていたように思われます。しかし、ある時、そのことに気づきまして事態が一変いたしました。それがちょうど半ばだったと思いますが、それ以降は外から内に、または自分のものといえます。自己を観るといいう方に向かつていきました。すこし言葉をかえていえば、仏または仏の世界に向かったといえます。具体的には、お経の世界、坐禅の世界ということになるわけですが、そうして今日までまったく愚かな私がこうして無事に日々を過ごすことができ、また、今日このような最終講義をさせて頂くことができているのは、誠にありがたいとしかいいようがありません。それもすべてこれまでご指導して頂いた先生方、そして今日ここにお見えの皆様はじめ、あらゆる方々のお陰であります。とりわけ、この私を最初から温かく迎えて頂いて、そして支えてくださった、駒澤大学という大学に心から御礼申し上げます。

すこし前置きが長くなりましたが、本日はこれから駒澤大学仏教学部における最終の講義を、つまり私の最後の話を「仏の美学—聖なる沈黙—」と題して、させて頂きます。

仏教の世界におきましては、あまりふさわしい題ではないかもしれませんが。しかし最近、私の教えは大変すばらしい見事である、立派であるというように、とくに思うものでありますから、そのすばらしさを心において、このような題にしました。決してエステティック (esthétique) といえますか、いわゆる美学、審美学といった学問に触れるようなものではありません。どこまでも仏教はすばらしい、そしてその仏教の教えとは何か、ということをお経から、或いは言葉にはならない坐禅を通して考えてみようというものであります。

わたしたちが一般に美ということ、美しいということに囚われることを、仏が不浄想の実践の中で浄想として退けておられることは、よく知られたところであります。「法句経」という真理のお経として大変よく知られているお経がありますが、その第七に「『美のものなり』と観続け、感覚器官を護らずに住み、食事に量を知ることなく、怠けて精進することもない、かれを悪魔は必ず襲う、風が弱い木を襲うように」という言葉があるとおります。美しいものを美しいものと如実に観る、美しくないものを美しくないと如実に

観る、これが仏の見方でございます。

(一) 教え

まず仏の教えとは何か、でございますが、それは釈尊が入滅されるとき「如来最期のことば」とされております、いわゆる辞世のことばに見事に示されているとみることが出来ます。

いかなるものも移ろい行きます。怠ることなく努めなさい。
yayadhammā sankhara, appanādena sampācetha.

(パーリ仏典・長部第16『大般涅槃經』D. II, 156)

短いのですが、直訳いたしますと「諸行は滅法である、不放逸に努めよ」となります。これは前後の二つの言葉からなっておりまして、前半の「いかなるものも移ろい行きます」という言葉は、諸行の無常というものを教示なさったものです。その無常につきましては、釈尊が入滅されるときに帝釈天 (Sakka) が説いたとされる「無常偈」というものがあります。

諸行は実に無常なり 生じ滅する性質のもの
生じてはまた滅しゆく その寂滅は安楽なり

これは諸行無常の偈で、大変有名な句であります。その内容はずし難いかもしれません。諸行とは何かということですが、私たちが見たり、聞いたり、あるいは心で考えたりすることを指しております。自分で作り出すことはみな無常だと、生じては滅し、変化するものだとということでありました。しかし、私たちが仏教でいう「愛・慢・見」、つまり渴愛・慢心・邪見ですが、その愛という渴愛、慢という慢心、見という邪見、こういったものがなく、そういうものを作り出さないで、見聞きし考えることができれば、そこには不安や動揺といったものがなく、寂滅という静まりや安らぎがあるのみ、つまり涅槃が知られるのみという内容のものであります。ちなみに日本には、ご承知のとおり「いろは歌」というものがございます。

色は匂へど散りぬるを わが世たれぞ常ならむ
有為の奥山けふ越えて 浅き夢みじ酔ひもせず

これは誠によくできたものだと思います。

つぎに、後半の句を見てみますと「怠ることなく努めなさい」とあります。これは世界も、つまり自己も、すべてが無

常でありますから、常に念をそなえ怠けずに、正しい目的に向かつて努力、精進しなさいといわれたものであります。諸行は無常であり、それ故に人間の知性と努力によって進みなさい、というわけです。このことは、「不死の偈」というものにも、よく示されていると思います。

努めることは不死の道 *appamādo amatapadam*
(戒意甘露道)

怠けることは死への道 *paṇādo maccuno padam*
(放逸為死徑)

努める者は死にゆかず *apamattā na mīyanti*
(不貪則不死)

怠ける者は死者のよう *ye paṇatā yathā mañ*
(失道為自喪)

(小部『法句』 Dhṃ, 21)

スリランカでもよくこの言葉を聞きました。みんなから大変好まれる言葉でございます。これは特に仏に深く帰依する王妃が、ある邪な王妃に嫉妬されて宮殿に火を放たれたときに、火定という火の坐禅、瞑想に入り、そして火をそのまま受けて、心静かに正念を保って火の中に消えていったという話からできた偈であります。つまり、放逸という怠けという

ものは、死の道であるということであらわしたものです。それに対して、不放逸という正念、あるいは努力は、不死、安楽、安穩の道であるといわれたものです。このように、仏の教えというものは無常という言葉に収まるといえまじし、またいつどこでどのようなことが起こっても、わたしたちは常に正念を保ち、それに対処することが求められるのであります。

かつて我が国の西行法師が次のような歌を詠まれました。これも大変有名なものでございます。

願わくは花の下にて春死なむ そのきざらぎの望月のころ

願わくは春、花の下でそれも望月、つまり二月の満月、十五日の涅槃会の頃に死にたいものだ、ということでしょうか。日本の誰もが愛してきたものでありますが、仏の最後の言葉とはまったく違ったものといえるかと思えます。一般の辞世には二種類があるとされます。中国で処刑される時の言葉、詩というのが一つ。もう一つは、いわゆる僧侶の遺偈というものです。これは後者にあたり、隠者のものになると思えます。

いずれにしましても、仏の言葉は最初から最後まで「無欲」の言葉で、今この涅槃とか、静まりというものを説き教へ

るものです。それに対して西行法師のものは自分の願望というものが示されておりますから、その意味において「欲」によっているといえまじし。時間も場所も限定されておりまじし、およそ無常の教えから遠いものであろうかと思われまじし。当時もこの歌に対して、批判があつたということでございますが、それはその批判として一般の人に任せる他ないのであります。

次にお経の中で最もよく知られたひとつの言葉、つまり「七仏通誠偈」を見ていきます。以下のように三つあります。

①いかなる悪も行なわず *sabbapappasa akaranam*

(諸悪莫作)

もつぱら善を完成し

kusalassa upasampada

(諸善奉行)

自己の心を淨くする

sacitipariyodapanam

(自淨其意)

これが諸仏の教えなり

etam Buddhāna sasanam

(是諸仏教)

②耐え忍ぶは最上の修行

khamī paramam tapo titikka

(觀行忍第一)

涅槃は最上、と諸仏は説く

nibbanam paramam vadanti Buddha

他を害するは出家に非ず
na hi pabbajito paṭipagghāṭī

(仏説泥洹最捨罪作沙門)

他を悩ますは沙門に非ず
na samano hoti parami vīṭṭhayaṇīto.

(無燒害於彼)

③ 罵り害することもなく
anupāvādo anupagghāto

(不燒亦不惱)

根本戒をよく守り
pāṭimokkhe ca saṃvvaro

(如戒一切持)

食事において量を知り
matāṇhuta ca bhataṣṣimī

(少食捨身貪)

遠く離れて臥し坐り
pantaṇ ca sayanāsanaṃ

(有行幽隱処)

また禪定によく励む
adhiccitte ca āyogo

(意諦以有黠)

これが諸仏の教えなり
etaṃ Buddhāna sāsaṇaṃ.

(是能奉仏教)

(長部第14『大譬喻經』D. II, 49-50)

(小部『法句』第183-185 Dhṃ. 183-185)

これらの偈は仏教の特に実践的な面をすべて言い得ている

仏の美学 — 聖なる沈黙 — (片山)

というように思います。出家をした後は、どこまでも覺りに至るまで、悪不善の業をつくらない、善を起こすこと、といった内容がこの中にいわれております。そして、心を清めるということ、それが諸仏の戒めになるものでありますが、大變よく知られたものが第一の偈です。これは「諸悪莫作・諸善奉行・自淨其意」この三つが主となっておりですが、いずれも順番に「戒・定・慧」が意味されているというように理解されるものであります。戒・定・慧の内容を仏が代々示してきたものであるという内容です。戒は言うまでもなく、五戒を根本とするものです。五戒は「不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒」からなりますが、前の四つと最後の一つは少し性格が異なります。前の四つは他者を大事にする、自分を含め他者も大事にする、命を奪わないとか、盗みをしてないとか、不倫をしないとか、嘘をつかないなどで、すべて他者を尊重した慈悲の心を示すものです。それに対して第五番目の不飲酒戒は、ご承知のとおり、お酒を飲まないということですが、これは口あるいは手でもってということではなく、心の問題を主としております。つまり中々難しいことではあります。お酒を飲むということは最初から正しく考えるということを通じて退けるものであるのです。これは智慧の戒とも呼ばれるのでございます。

いずれにしても、私たちの生活において大事なことは、こ

の戒という部分であります。特に五戒がそれを示しています
が、こうしたことがこの中に述べられているわけです。内容
につきましては、まずその戒を学ぶ、つぎに心を静かにさせ
る、または生活を整えた上で心を静かにする禪定を学ぶ、そ
して、今度は心を静かにしたところで智慧を学ぶ、というも
のです。「諸悪莫作・諸善奉行・自浄其意」という三つは
「戒・定・慧」のいわゆる三学が示されたものとされていま
す。

あと二番目と三番目の「七仏通誡偈」も、基本的には智慧
と慈悲をどうしても欠かすことができない、とりわけ出家者
にはそれが不可欠である、ということが説かれているわけで
す。いずれも内容からしますと、「戒・定・慧」という大事
な実践が主になっております。

それから、また怠けの心が無いように、怠けず努めるよう
に、ということが言われますが、仏教の実践として重要なも
のに、いわゆる「三観偈」がございます。

〈無常観〉

「あらゆる行は無常なり」と sabbe sankhārā aniccā ti

(生死非常苦)

智慧をもつて観るときに yadā paññāya passati

(能観見為慧)

かれは苦を厭い離れる atha nibbindati dukkhe

(欲離一切苦)

これ清浄にいたる道なり esa maggo visuddhiyā

(行道一切除)

〈苦観〉

「あらゆる行は苦なり」と sabbe sankhārā dukkhā ti

(知衆行苦)

智慧をもつて観るときに yadā paññāya passati

(是為慧見)

かれは苦を厭い離れる atha nibbindati dukkhe

(罷厭世苦)

これ清浄にいたる道なり esa maggo visuddhiyā

(従是道除)

〈無我観〉

「あらゆる法は無我なり」と sabbe dhammā anattā ti

(衆行非身)

智慧をもつて観るときに yadā paññāya passati

(是為慧見)

かれは苦を厭い離れる atha nibbindati dukkhe

(罷厭世苦)

これ清浄にいたる道なり

esa maggo vusuddhiya.

(従是道除)

〔法句〕第277-279偈 *Dhp. 277-279*)

仏教にはいわゆる「止観」が実践の基本に置かれています
が、それは心を静めるという「止」(samatha)と、もう一つ
静かな心の中で正しく考えていくという「観」(vipassana)と
からなります。ここは正しく観るといふ観法に三つあるとい
うことで示されたものです。あらゆる行は無常であると観る、
あらゆる行は苦であると観る、あらゆる法は無我であると観
る、というものです。

最初を読んでみますと、「あらゆる行は無常なりと智慧を
もつて観るときに、かれは苦を厭い離れる、これ清浄にいた
る道なり」、こういう無常観を説いた言葉がございます。ど
んなことも私たちが作り出すことは無常の中にあるものであ
る、それを智慧でもつて観るときには苦が消える、というも
のです。それは、清浄という涅槃、静まりに至る道である、
その「道」というのは正しく観る智慧としての「観」を指し
ているものだという内容であります。

二番目の「あらゆる行は苦である」の中の「苦」というの
は大変理解がむずかしい言葉であります。漢字で書かれると
「苦しい」というふうにと取ってしまいますけれど、「苦」には

「苦しむ」という一つの意味と、もう一つは「不安定」とか
「空しい」という意味がございます。ここは後の方で取らな
ければ、なかなか意味が通らないところです。つまり、わた
したちが作り出すものはすべて不安定なもの、空しいもの、
空虚なものであるということです。

それから三番目の、「あらゆる法は無我である」という部
分は、「行」ではなく「法」となっております。「法」という
のは、わたしたちが作り出すものすべてを言いますが、そ
他にわたしたちが作り出さないもの、涅槃といったもの、こ
れがここに含まれていますから、最も広い内容として「法」
という言葉が使われております。わたしたちが作り出すもの
も、作り出さないものも全部それは無我であるということに
なります。我として捉えられるものではないということでは
そのように「無常・空・無我」という「三相」を観る、これ
が仏教において大変大事な実践となっております。もちろん
これは智慧のための実践であります。このようなことが仏陀
の最期の言葉、いわゆる辞世の句とされる短い言葉の中に含
まれており、ここにはいわば仏教の教理と実践が見事に示さ
れているというわけであります。

(二) 学び

さて、今度は「仏の学び」と言いましょいか、もう少ししい

えは「仏教の学び」、「仏教学」というものは何であるかということについて見てみたいと思います。パーリ仏典の中部の『聖求経』というお経の中に次のような言葉が知られます。

学道

比丘たちよ、そなたたちが集まった場合に、二つのなすべきことがあります。すなわち（法の話）、あるいは（聖なる沈黙）です。

samnipatānam vo bhikkhave dvayan̄ karāṇiyam, dhammī vā
kathā ariyo vā tuṇhāvo.

（中部第26 『聖求経』 M. I. 161）

これは釈尊が若い頃を述懐されて述べた言葉であります。出家の弟子は、集まり、話をするならば必ず、*‘dhammī-kathā’* という法に関する話をすべきである。そして黙っている場合には、*‘ariya-tuṇhāva’* という聖なる沈黙、つまり坐禅・瞑想という沈黙を行うべきであると言われたものであります。要するに、法の話をするか、各自で坐禅をするかのどちらかだというわけです。

ここに説かれる法の話というのは、真理として知られる「苦・集・滅・道」の四聖諦という仏教の根幹の教えに関する話です。或いは「十話事」（後述）があります。十種類の

話がありますが、いずれもこれは自己（五蘊）の生・滅を明らかにするものであります。例えばパーリ仏典の相应部「大篇」の『無益話経』、別の言葉でいえば「畜生話経」というものがあります。「畜生話」は *‘tiracchāna-kathā’* といいますが、世間の無駄話といった、ある意味の井戸端会議のようなものです。そのお経の中で、お釈迦さまは無駄な話、動物のような智慧の弱いものの話をされた後、それに対して、意義のある話、利益のある話をされますが、その中にはこうあります。

比丘たちよ、そなたたちが話す場合、『これは苦である』と話すべきです。『これは苦の生起である』と話すべきです。『これは苦の滅尽である』と話すべきです。『これは苦の滅尽にいたる行道である』と話すべきです。

つまり、この中では苦・集・滅・道について話すべきだとされます。

それはなぜか。比丘たちよ、この話は、厭離のため、離貪のため、滅尽のため、寂滅のため、証智のため、正覚のため、涅槃のためになるからです。

（相应部「大篇」『無益話経』 S. V. 129）

そして、苦・集・滅・道の話というのは、わたしたちの静まりに役立ったためのものであり、それしか静まりというものが得られないということを言われたものであります。要するに四聖諦、或いは四諦について話すべきである。それは滅尽、涅槃に資するからであるということです。

次に、パーリ仏典の増支部「十集」のなかに『第一話事経』という「話事（論事）」、話事に関する第一のお経がありまして、そこに十種類の話が示されています。

比丘たちよ、十の話事があります。十とは何か。少欲話、知足話、遠離話、不交際話、精進努力話、戒話、定話、慧話、解脱話、解脱智見話です。

（増支部「十集」『第一話事経』4.1.420）

これは、見てお分かりのとおり、少欲や知足、戒・定・慧の話であります。これらの話は、いわゆる三蔵にまとめられます。三蔵を学ぶ道といえると思います。それは言葉とか、知識とか、自他とか、相対とか、功德の世界とかの領域にあるものです。いわゆる三蔵法師という言葉が知られますが、三蔵法師の世界に関わるものともいえます。それは次のようなものにまとめられます。

仏の美学 — 聖なる沈黙 — (片山)

三蔵の道 言葉、知識、自他、相対、功德の世界

「律蔵」(Vinayapitaka) …

隨犯の教説 防護不防護の話 命令の説示

「経蔵」(Suttanipitaka) …

相応の教説 邪見離脱の話 慣用の説示

「論蔵」(Abhidhammapitaka) …

如法の教説 名色識別の話 勝義の説示

このように法の学びというのは、三蔵にまとめられると思います。それは正しい法を構成する、「教・行・証」、『教行信証』の「信」が含まれない「教・行・証」という基本の正法を示す言葉があり、この中の最初の教えという「教」に当たります。ただし、この場合の「教」というのは「九分教」の教でありまして、聖典とか三蔵という内容をもつものではないです。これに対しまして、釈尊は先ほどのとおり各自に聖なる沈黙に励むようにと言われました。つまり、坐禅に励みなさい、戒・定・慧の三学に勤しみなさい、ということがあります。三学につきましては、パーリ仏典・長部の『大般涅槃経』という、お釈迦さまの晩年一年間の旅の記録、旅といひましても説法の記録でございますが、そのような『大般

涅槃経』に次のように出てまいります。

戒とは以上のとおりです。定とは以上のとおりです。慧とは以上のとおりです。戒を十分に修した定は大きな果報があり、大きな功德があります。定を十分に修した慧は大きな果報があり、大きな功德があります。慧を十分に修した心は、もろもろの煩惱から、すなわち欲の煩惱から、生存の煩惱から、無明の煩惱から正しく解脱します。

(長部第16『大般涅槃経』D. II. 87)

ここでは戒とは何か、定とは何か、慧とは何か、ということとは具体的には説明されていませんが、前後にそれが非常に詳しく示されております。いづれにしても三学という名前は示されておりませんが、内容は丁寧に紹介されているといつていいと思います。それをまとめますと次のようになります。三学の道ということになりましょうが、沈黙、智慧、自己、絶対、涅槃の世界というようにまとめられそうです。

三学の道 沈黙、智慧、自己、絶対、涅槃の世界

「戒」(sīla) …

増上戒学 (adhīstāsikkhā) 違犯の捨断

離 (vīra) 正語・正業・正命 ↓別解脱

「定」(samādhī) …

増上心学 (adhīcītasikkhā) 頭在煩惱の捨断

止 (samātha) 正精進・正念・正定 (四禪) ↓心解脱

「慧」(pañña) …

増上慧学 (adhīpañāsikkhā) 随眠煩惱の捨断

観 (vipassanā) 正見 (智慧)・正思 (慈悲) ↓慧解脱

戒というのは、増上戒学 (adhīstāsikkhā)、勝れた戒学といわれます。戒の学びとも言われますが、全体としては違犯の捨断というものであります。離 (vīra) という言葉があり、悪・不善から離れることを言いますが、その内容としては八正道の「正語・正業・正命」というものであります。戒は全体としては別解脱律儀、戒本という ‘pāṇinokkha’ というものになります。これが出家者に大事です。

定という禪定、静かな心を得るといえるのは、増上心学 (adhīcītasikkhā)、勝れた心を用いる、あるいは作る、そういう学びとされますが、これによって頭在煩惱の捨断があり、わたしたちの眼に見えるような煩惱が捨断されます。要するに腹が立ったり、怒ったりする、その時に坐禪・瞑想すれば

即ち静まるということですから。そうしたものを主としている学びが止（samatha）といわれるものでありますが、それを完成したものを定といいます。八正道でいえば「正精進・正念・正定（四禪）」にあたるもので、心解脱といわれるものでもあります。

慧というのは勝れた慧の学びですが、この増上慧学（*adhī-paṇṇāsikkhā*）は眼に見えない、まだ眠っているような随眠の捨断を目的とするものです。これは特に観（*vipassana*）という実践によって完成するものです。先ほど見ましたような自己（五蘊）の無常・無我を正しく観ること、これが「観」といわれるものであります。それが八正道の「正見（智慧）・正思（慈悲）」という部分にあたると思います。この正見・正思はわたしたちの智慧そのものでありますから、とても大事なのですが、とりわけ「正見」は智慧そのもの、四聖諦とか縁起の観法であります。それに対して、「正思」（正思惟）は他者を害さないという、他者を傷つけないという考えをいうもので、慈悲の心をそなえた智慧というものになります。ですから八正道の正見・正思という智慧の部分は、智慧と慈悲の二つからなっており、特に全体としていえば正見からなるものであります。それは慧解脱というものになると思えます。

戒は先ほど申しましたが、仏教の生活する上での戒めと

なるものですし、人間としては必ずそなえなければならぬ事柄、智慧と慈悲の心を説くものであります。それから特に、戒は五戒が大事なものだということを先ほど申しましたが、最後の智慧の戒を示す不飲酒というものは、なかなか守ることは難しいものです。特にわが国の仏教者には頭の痛い話しかもしれません。飲酒とは最初から智慧を放棄する、そのことを宣言するようなものです。仏教と相対立するということ、不飲酒戒が与えられるということになります。

それから三学に関わる大事な実践として、「四梵住」というものがございます。定の中に入るものであります。心を静めるといふ実践に入るもので、とりわけ慈悲の実践になります。「慈・悲・喜・捨」というご承知の言葉がございます。静かに心を調べて、誰もが幸福であるように、誰もが苦しみがなくなるように、誰もが喜ぶようにと願う非常に大事な実践であります。そしてまたさらに大事なものは、その最後にあります「捨」という実践です。「*upakkha*」といい、観察することが原意ですが、無常という道理をよく観察することになります。「慈・悲・喜」という三つの大事な心を他者に向けるということ、それはどこまでも他者の話になります。が、もう一つ大事なことは、自分をよく観るといふことであり、それが「捨」であります。つまり法を観るといふことであります。諸行の無常、諸法の無我を知らなければならぬ、

その中で無量の実践をする、無量の慈悲喜捨、無欲の心を向けていくと言われたのであります。このような四梵住の実践も心を静かにするということが大事であります。

それからもう一つ。今度は、名前に「念」という言葉が入りますが、「四念処」という実践があります。「身・受・心・法」といって、まず自分の身体、自分の感覚・感受、自分の心、というものを念じ、観る。それは何が何であるかということを観ていく、すべて無常のものであると観ていくのです。そして最後に法というものを観ていく。法というのはあらゆるもの、先ほどもご紹介したものでありますから、四聖諦の内容も全部ここに入ります。これは最初の三つ「身・受・心」とはすこし趣きが違っています。いずれにしても心を静めるということと、同時に心を静めてから正しく観察するという「観」の実践が入るもの、これが「四念処」というものです。ですから「定」の部分に入りますが、「慧」の方の智慧が主となった実践、これが四念処であり、これもわたしたちはどうしても理解し、身につけなければならないと思います。

いずれも憂いや悲しみを乗り越えて、涅槃・静まりへ向かってゆく、そういう実践と言われているものでございます。

(三) 覚り

これまで簡単に仏の教えや学びである「行」を見てきましたが、ここで「証」(Prativedha)、覚りというものについて見たいと思います。これは大変難しいものであります。パーリ仏典の小部に『大義釈』というお経、お経といっても「論」に近い内容のものであります。ここには、「仏とは諸諦を覚るお方、つまり四聖諦(苦・集・滅・道)を覚るお方であり、人々を覚らせるお方であるから仏である」という「仏」の意味が説明されています。

つまり、ブツダというお方は智慧のお方、智慧をそなえたお方であるということです。それから他者に智慧を差し伸べる慈悲のお方、それは仏が自ら智慧を得て他者に智慧を授けるお方であるということです。これはまた仏教が智慧の宗教であるということでもあります。つまり、智慧と慈悲ということが常に仏教に対していわれますが、慈悲というものの究極は何かといいますと、智慧を他の者に与える、他の者に授ける、他の者に示すことであります。智慧こそが各自の悩みや苦しみを解決するものといえます。そこから、誰にも智慧というものが不可欠であるということでもあります。ですから仏教は、他者に対してまた、その智慧によって慈悲心を示すことを教える宗教であると思います。

そのような智慧を示す、とくに最初の言葉として伝えられているものが『法句経』の第一五四偈です。これは伝統の仏教においてはブツダの最初の言葉、あるいは成道の時の言葉とされるものです。

家の作者よ、お前は見られた 二度と家を作り得ず

お前の垂木はすべて折れ 棟木も破壊されている

心はずでに無作に至り 渴愛の滅に到達す

〔法句〕第154偈(Dhp. 154)

この前の句(第一五三偈)では「私は智慧が無いときには輪廻をさ迷った」とあります。行(苦)は生じては滅し、生じては滅す。このようなことを繰り返すばかりであったというのです。

ここで「家」というものは一体何かといえますと、それは五蘊、私たちの身体と心、自分自身というものです。それから「作者」とは、それは渴愛、欲望、つまり欲であります。仏教では、私たちは欲からなっているとみます。それを五蘊として見るわけであります。「垂木」というのは諸々の煩惱のことです。それから「棟木」というのは中心になる木のことです。無明ということですから、それが智慧によって観られている、見通されているといえますか、見破

られているということでもあります。そして心は常に「無作」、作ることがない、ということですね。つまり、先ほど申しました「愛・慢・見」といったものによって作ることがない。渴愛の滅に到達している。これは阿羅漢果というものでしょうか、静まりの結果を得たもの、という内容であります。それから次に律藏に「大篇」という部分がありますが、そこに知られる「覚りの偈」というものををご紹介します。

〔ひたすら禪定するバラモンに 実には諸法が明らかとなる

その時すべての疑惑は消える 因のある法を知るゆえに〕

〔ひたすら禪定するバラモンに 実には諸法が明らかとなる

その時すべての疑惑は消える 諸縁の滅尽を知ったゆえに〕

〔ひたすら禪定するバラモンに 実には諸法が明らかとなる

その時かれは魔軍を破り立つ 太陽が空を照らすように〕

(律藏「大篇」Vin. 1.2)

これは一つの譬喩で、「八正道」(中道)の実践によってすべてが整ったという内容です。基本的には「縁起」というものが知られ、それによってすべてが整ったということでもあります。内容からすると、「四聖諦」というものがすべてわかった、特に道諦というものがわかったということを示されたものと理解されます。

それからパーリ仏典の長部經典の『沙門果經』では、弟子の覚りについて述べたものがあります。

このように知り、このように見るかれには、欲の煩惱からも心が解脱し、生存の煩惱からも心が解脱し、無明の煩惱からも心が解脱します。解脱したときには、解脱したという智が生じます。『生まれ尽きた。梵行は完成された。なすべきことはなされた。もはやこの状態の他にはない』と知ります。

(長部第2『沙門果經』D. II, 84)

これは、いわば阿羅漢の心境を示すもので、あらゆることが見通されたということですね。このように覚りとは何かと云いますと、あらゆる形で示されていますが、大まかにいえば二つといえるかもしれません。一つは、坐禅などによってその時のみの静まりを得る一時的な「時の解脱」というものがあります。つまり、坐禅から出ると普通に戻りますから一時的な解脱といわれるものです。これに対して、時間を取らないで、いつでもどこでも知ることができる、見ることができ「不時の解脱」というものがあります。それは智慧による解脱であります。智慧がそなわれれば私たちは迷うことがないわけですから、いつでもどこでもその智慧をもってすべて

に対処できるということです。たとえば、どんな大震災があらうとも、個々の大問題があらうとも、それは自分の中で覚悟ができる、まさに覚ると言いますか、知ることができるわけがあります。不時の解脱といわれるように、時を数えたりしない、いつでもどこでも自由であるという解脱があるということです。いづれにしても、智慧によって、心によって、自分の中に静まりがあるかどうかということでもあります。

それから大乘仏典と言われるものにはたくさん優れた言葉があります。特によく紹介されるものとして、次のような言葉が『金剛般若經』の中にあります。

〈諸法皆空〉

如来は、世界は世界にあらずと説き、これを世界と名づけたり。

(『金剛般若經』)

如来によれば、諸法の世界は実相の世界ではない、これは世界である、ということであります。わたしたちの見る世界は欲の世界であります。私はここに真実の世界を見るわけですから、世界であつて世界でない、という言葉が説かれたのであります。このように如来は「観る」「知る」「悟る」ということをなさるお方であるといえます。

それから『法華經』の方便品には、次のような有名な言葉があります。

〈諸法実相〉

仏の成就せる所は第一の希有なる難解の法にして、ただ仏と仏とのみ、すなわちよく諸法の実相を究め尽くせり。

〔法華經〕方便品

仏の法というのは仏と仏、つまり無欲の者と無欲の者、その間でのみ解り、覺り、語り合えるのだということであり、つまり、欲のある者は無欲の者のことを何もわからないのです。わたしたちは迷っており、迷わぬ者とは何もわからない。それに対して、仏がわかるということは、仏でなければ、お互いが仏でなければ理解しえないということであり、その主旨は先ほどの『金剛般若經』と全く同じであります。

最後に道元禪師の『正法眼蔵』「現成公案」の巻の冒頭の言葉をみておきたいと思いますが、これもよく知られたものがございます。

〈現成公案〉

諸法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生

あり、死あり、諸仏あり、衆生あり。万法ともにわれにあらざる時節、まどひなくさとりなく、諸仏なく衆生なく、生なく滅なし。仏道もとより豊儉より跳出せるゆゑに、生滅あり、迷悟あり、生仏あり

〔正法眼蔵〕現成公案

すべて、現成公案、すなわち坐禪を説かれた言葉でございます。すこし難しいところですが、諸法が仏法、実相であるときは迷悟がある、修行がある、生死がある、ということ。また万法、諸法が我でない、実相であるときは諸仏はない、衆生はない、つまり諸法が実相であるときには、どこまでもある、どこまでもない、こういうことあります。仏道、仏法はどこまでも豊儉より跳出し、いわゆる有無ということを超えていますから、生滅があり、迷悟があり、生仏という、つまり衆生もあり、仏もあり、というわけです。要するに諸法は実相であるということを言われたのであります。

道元禪師はまた「弁道話」の巻でも、「仏法にはこれ一法なり」と言っておられますが、その主旨は先の仏典と変わるどころは全くありません。道元禪師の場合には坐禪からこのような言葉、或いはこのような表現を用いられたのだと思います。非常に難しいですが、坐禪をすれば、すんなり入ってくる内容でもありません。

以上、簡単ではございますが、教えとは何か、学びとは何かということを見てまいりました。まとめは以下のような言葉で締めくくりたいと思います。

仏の教えは美しい 仏の学びは麗しい

無文字の経 有文字の禪

諸法実相 現成公案

教不教 学不学

聖なる沈黙

仏の世界はどこまでも静かであり、どこまでも清らかです。それは智慧と慈悲に満ちており、常に調和が保たれているということでありましょう。どの教え、どのお経をとってみても、また坐禅をしてみても、まったくの静まりがある、まったくの調和があるということを実感する次第であります。こうした道をこれからも歩んでいきたいと思っておりますし、どなたにもこの道を歩んで頂きたいと願っております。

最後の講義により、皆様のお耳を汚しましたことをお赦し頂きたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。(終)